

マイケル・コリンズ評伝：対英独立ゲリラ 戦争の立役者

鈴木，良平

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

94

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

66

(発行年 / Year)

1995-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004599>

マイケル・コリンズ評伝

—対英独立ゲリラ戦争の立役者—

鈴木良平

1. はじめに—ガンジー、毛沢東、アラビアのロレンス—

サラエボでのセルビアの一青年によるオーストリアの皇太子夫妻暗殺の銃弾が周知のように第一次世界大戦（1914-18）をひきおこす。それが英国では徴兵法の制定を導く。その徴兵法が英国の植民地であるアイルランドにも適用されるか否か、それは勿論、英国対アイルランドの政治的力関係で決まることだが、徴兵法適用の危機感がアイルランド人の不安を大きくかきたて、それまで停滞気味だったアイルランドのナショナリストたちの革命運動を一挙に覚醒させることになる。また、同時に、英国から付与される形のアイルランド自治法が世界大戦の勃発を口実に棚上げされてしまう。それに対する不満もあって大戦勃発後のアイルランドは煮えたぎっていた。

そのような情勢に乗じて「英国の危機はアイルランドの好機」を伝統的な合言葉とする秘密結社の IRB (= Irish Republican Brotherhood, アイルランド共和主義者同盟) は、20 世紀初頭のブーア戦争時に蜂起できなかった悔しさと反省をこめて、今度こそチャンスとばかりに対英独立蜂起 (= イースター蜂起, 1916 年) を企てる。その蜂起の指導者の一人が前回書いた社会主義者のジェームズ・コノリーであるけれども、残念ながら「時期尚早」ということでその蜂起は失敗に終わってしまう。しかしながら、その蜂起はレーニンに刺激を与え、翌 17 年のロシア革命を導くのだ。

英国の植民地であったインドのネルーは、レーニンと並んでアイルランドのイースター蜂起に関心をよせた一人であった。英国に長らく留学していたネルーは 1907 年ケンブリッジ大学生の時の夏休みにダブリンを訪れ、アイルランドのシン・フェイン (われらのみ) 党の大会に出席している。そしてインド

国民会議派とシン・フェイン党との類似性を父親に報告している⁽¹⁾。ガンジーの対英非暴力不服従運動もシン・フェイン党の Arthur Griffith の政策を利用しているという説⁽²⁾もあるし、中国の毛沢東やヴェトナムのホーチミン、さらには、チェ・ゲバラなども本論の主人公である Michael Collins (1890-1922) の影響をうけたという説⁽³⁾もある。つまり、「ゲリラは人民という大海の中を泳ぐ魚である」という点において、毛沢東やチェ・ゲバラはマイケル・コリンズの対英ゲリラ戦争に多くのものを学んでいると言うのである⁽⁴⁾。というのは、Michael Collins was the founder of modern guerrilla warfare, the first freedom fighter, or urban terrorist. (H, xii) だったからである。

そのコリンズは (B) の著者が (A) に書いている文章によれば、フランス革命時の Danton にたとえられている。祖国と純朴な国民を愛し、国家の存亡の危機において猛烈なエネルギーを発揮した点において、火のように燃える精神と寛大な性質において、二人は似ていると言うのだ。「ダントンのようにコリンズは国を救った。そして警戒心を軽蔑したために倒れた。ダントンは歴史上最も偉大な言葉の一つを発した。『わたしの名前は滅ぼさせよ。しかしフランスは救われせしめよ。』コリンズは対英条約に関する秘密会議の席上で、アイルランドのために条約に賛成するよう訴える時に同じようなことを言った。『あなた方は栄光をすべてひとり占めにして、われわれにあらゆる恥辱を与えよ。しかしわれわれにアイルランドを救われせしめよ。』と。」(A, p.26)

そのマイケル・コリンズは2歳年長のアラビアのロレンスを崇拜していた。ロレンスの父親はアイルランドの貴族の出であり、母親は父親より15歳年下のスコットランド生まれの「保母兼家庭教師」であり、不倫の二人はウェールズに駆け落ちして姓をロレンスと勝手に変えて暮らす。そして次男として生まれたのが T.E. Lawrence (1888-1935) であった⁽⁵⁾。(ついでに言えば、英＝アイルランド条約のコリンズの交渉相手になるロイド・ジョージ英首相もロレンスと同じくカーナヴォン州生まれのウェールズ人である。つまり、ケルトの血をひいていたわけだ。) T.E. ロレンスはイースター蜂起の1916年の10月にアラブのトルコに対する反乱に身を投じて、砂漠の遊牧民ベドウィン族とともに戦い、「機動ゲリラ戦術の確立⁽⁶⁾」を果たす。しかし、19年7月には動員を解除されて、ロンドンに帰っている。「まもなくオックスフォード大学……の特別研究員に選ばれたので、以後1921年まで、オックスフォードとロンドンの

両地で、表面は解放された自由の生活がつづくのであるが、実はこの時期こそ彼が、あらゆる手段をつくして……中東事情に関する表裏の真相を暴露し……陸軍当局からの激しい反感をかかったのもこのときであった。」⁽⁷⁾ 植民地担当相のチャーチルは21年2月に中東局を新設し、「ロレンスを招いて政治顧問を委嘱した。」⁽⁸⁾

ロレンスとコリンズは1921年12月にロンドンで会っている。コリンズが対英条約の交渉団の一員としてロンドンに滞在していた頃である。ロレンスを通じてアラブ人になされた英政府の戦争時の約束の不履行に怒り、悩み、失意のうちにあったロレンスを、コリンズはアイルランドに招こうとする。遊撃隊の司令官になってもらい、ゲリラ兵を訓練してもらいたかったからである。ロレンスはアイルランドの血筋をひいていることと、英国のアラブ人に対する処置に不満を抱いていたせいもあって、アイルランド問題に関心をいただいていた。だが、二人の提携を恐れた植民地相チャーチルは、二人の分断をはかるのだ。ロレンスは以前から植民地省の顧問をやめてRAF（英国空軍）に入りがっていたのだが、チャーチルはそのような要望を馬鹿げたこととみなしてロレンスの辞任を認めなかった。しかし、コリンズとロレンスの接近を知ったチャーチルはショックをうけ、一転してそれまでの反対を引っこめ、ロレンスの辞任と空軍入りを認めて、二人の分断をはかったのであった。（H, pp.395-6）そして「1922年12月22日、『デイリー・エクスプレス』紙はその第一ページに、『『無冠の帝王』一兵卒となる』という段抜大活字で、驚くべき特ダネを暴露したのである。……『世界的英雄』が、なんとジョン・ヒューム・ロスなる偽名の下に、一兵卒として空軍に入っているというのである。」⁽⁹⁾ 実際に入隊したには8月中旬で、コリンズの暗殺死の5日前であったとされている。（H, p.396）

そして、すべての歴史は勝者によって書かれるが、マイケル・コリンズの場合も例外ではない。彼は「コリンズなくしてはアイルランド革命は成功しなかったであろう」（E, p.101）と言われるような男でありながら、その歴史は彼の政敵であり、後に「アイルランド共和国」の大統領になる Eamon de Valera の立場から書かれているのだ。デ・ヴァレラはコリンズの死後も彼を恐れてかコリンズを弾圧した。1935年に軍事墓地のコリンズの墓の上に大理石で十字架の記念碑を建てる案が出されたので、遺族の兄弟姉妹が建立の許可を求めると、国有墓地だから不適當と国防大臣に拒否されてしまう。数年後の

再申請も記念碑の土台が大きすぎて両脇の墓地を浸食しているという理由で拒否される。遺族がデ・ヴァレラ大統領に二度も直訴して頼んでも、大理石は駄目だが石灰岩の記念碑ならよいか、碑文はアイルランド語で書けとか、建立式は司祭が一切とりしきるから遺族は出席してはいけないとか、ゴチャゴチャ注文をつけるばかりであったらしい。(H, pp.428-9) 39年に記念碑が実際に建てられ、除幕式がおこなわれた時は、司祭と寺男と遺族一人が出席しただけで、報道陣の出席などは勿論許されなかった。軍関係の縁者はアイルランドの最初の司令長官であったコリンズの記念祭に、50年間出席することを禁止されていた。そして1961年外務省発行の『アイルランドに関する諸事実』には、革命の元勳ともいうべきコリンズの肖像画は入っていなかった。その責任を問われて外務大臣は首相デ・ヴァレラと相談して削除したと答えている。(H, p.431)

1990年(コリンズ生誕百周年)に遺族がコリンズの生家などを国家に寄付した際にも、その式典に大統領が出席すべきか否かが、更には軍隊が参列することが許されるべきか否かが議論された。(コリンズの「自由国」の伝統をひく)フィッツジェラルド連立内閣の時は陸軍の参列は認められたが、(デ・ヴァレラの「共和国」の伝統をひく)政権党である共和党はたった一度だけ、コリンズ死後50年祭の時に陸軍の参列を認めただけであった。デ・ヴァレラにとっては、死後もコリンズは恐るべきライヴァルであったのであろう。

2. その前半生—Sinn Fein, IRB, Volunteers—

Michael Collins (1890-1922)の一生はわずか32年間という短いものであった。しかも敵方によって暗殺されたのである。その点では坂本龍馬に比せられるかもしれない。彼の短い人生の軌跡の跡をたどることは簡単である。アイルランドの田舎での15年間、ロンドンでの郵便局員としての10年間、そして1916年イースター蜂起以後のダブリンを中心とする6年間の政治活動、に分かれるだけであるから。ここではロンドン時代までのコリンズの前半生を扱うことにする。

コリンズはアイルランド南部のCork州の田舎に1890年10月16日に8人姉姉の末っ子として生まれた。コリンズ家の先祖は族長も出た由緒ある家柄だったらしいが、カトリック教徒は土地の所有を許されない時代だけに、当然

のことながら父親は小作農であった。父親は farmer, builder, carpenter (B, p.3) とも言われている。コリンズが生まれた時は父親は 75 歳であった。父親は 60 歳の時に 20 とも 23 歳ともいわれる親娘以上に年齢のちがう若い女性と結婚した。このような結婚は 19 世紀中葉の大飢饉以後の禁欲の時代（結婚できるのは一家で男ひとりと女ひとりだけという時代）にはさほど珍しくなかったという。家庭はかなり裕福で、父親は大変な読書家で、フランス語、ギリシャ語、ラテン語ができる独学の古典学者であり、数学の才能も豊かであった。勿論、アイルランド語も話せた。愛国者で、IRB にも加入し (H, p.7), 幼いコリンズに父はアイルランドの革命家の O'Connell や Thomas Davis のことなどを語り、また愛国主義の歌などを子供たちに繰り返し歌わせたという。(D, p.9)

その父親はコリンズが 6 歳の時に、アイルランドが将来自由になることを希望しながら死ぬが、コリンズは 5 歳の時から小学校に通い始め、担任の先生の影響をうけた。彼は腕力が強く、スポーツ万能だったが、読書も好きだった。シェイクスピアをはじめ英国の古典文学、更には Wolfe Tone, Robert Emmet, Thomas Davis などの革命家の本なども読んだ。(D, p.13) 読書好きのせいか後年のコリンズは膨大な手紙、指令、メモなどを残しているが、一日に同一人物に何回も手紙を書くほどだったらしい。

中学校に進むと Sinn Fein 党の Arthur Griffith の機関紙 *United Irishman* の影響をうけるようになる。(H, p.14) 母親は末っ子コリンズを姉 Hannie と同じくロンドンの郵便局員にしたがっていた。それでコリンズは郵便局員になるための受験勉強もした。その当時のコリンズ家のような階層の若者たちは、英国の公務員になるか、RIC (警察官) になるか、コリンズの長兄のようにアメリカに移住するしか方法はなかったのである。(D, p.16)

1905 年グリフィスがシン・フェイン党を設立した年に、15 歳のコリンズは英国の郵便局員の試験に合格し、翌 6 年 7 月に姉の働いているロンドンの郵便局員となった。それからイースター蜂起の直前にダブリンに戻るまで、約 10 年間コリンズは姉と一緒に西ケンジントン地区に住んだ。翌 7 年には母親も死んだ。

ロンドンでは税関などの公務員試験を受けるために、King's College の夜間コースに通ったりした。まもなくコリンズはゲーリック体育協会に入り、さらにゲーリック協会に加入してアイルランド語の勉強を始めた。後に両方の組

織の書記に彼はなっている。とにかく大変な読書家であった。小説家のフランク・オコナーに言わせると、「コリンズは死ぬ日まで異常なほどの読書家であった。歴史、哲学、経済学、詩などなんでも読み、機知に富んでいたで先生は必要なかった。彼は毎週劇場に通って、Shaw, Barrie, Wilde, Yeats, Colum, Syngeなどを賞賛し、有名な芝居のセリフなどは大部分暗記していた。」(C, p.18) ほどであった。

だが、1909年11月、19歳のコリンズは反英暴力行動も辞さない秘密結社のIRB（アイルランド共和主義者同盟）に加入した。(H, p.16) 翌10年、彼は郵便局をやめ、株屋の店員となる。更に第一次世界大戦勃発後の14年6月には別の会社に移っている。その直前にコリンズはIrish Volunteersのロンドン第一中隊のメンバーになっていた。戦争が始まって、徴兵され、英国のために戦うということはコリンズには考えられなかった。徴兵されればアメリカへ移住するしかないと彼は考えていた。すでに渡米してシカゴにいる長兄Patはコリンズにアメリカへ来るようにとすすめていた。

しかし、消極的な抵抗はコリンズの気質に合わなかった。彼は断固としてアイルランドのために闘いたかった。だが、15年4月コリンズはさらに転職し、アメリカの信託会社のロンドン支店に勤めた。徴兵という最悪の事態が来れば、アメリカの本店に転勤することが可能だからだ。(D, pp.30-32) このような株屋とか信託会社勤めの経験が、数年後に彼が「アイルランド共和国」の蔵相に任命される一つの要因になったのではなかろうか。

その頃本国アイルランドではIRBは16年のイースター蜂起を計画し、Irish Volunteersの執行部をにぎって、Volunteers（義勇軍）を手中に収めていた。徴兵令が16年1月に英議会を通過した。もう猶予はならなかった。26歳のコリンズは会社をやめアイルランドに戻った。と言うよりは、英国各地ロンドン、リバプール、マンチェスターなどにいたIRBのメンバーは蜂起にそなえて呼び戻されたのだ。(B, p.70) コリンズもその一人で、徴兵のがれなので逮捕される危険性もあったのだが。

ここで、今後の叙述の都合もあるので、簡単にSinn FeinやIRB、Volunteersのことを説明しておきたい。

Sinn Fein（アイルランド語で「われらのみ」の意）は1905年Arthur Griffithによって設立された組織（政党）である。グリフィスはコリンズより約20歳年長で、後にコリンズの上司、同僚になる人物であった。グリフィ

スの目的はアイルランドが「主権国家」として復活すること、つまり、アイルランドが英国に併合される（1800年）以前のグラタン議会に戻ることに、彼の念願であった。アイルランド人は自国の運命を自国の議会で決めるべきであって、英議会にはアイルランドのことを決定する権利はない。故に、アイルランドの議員はウエストミンスター議会に出席すべきではない、と英議会ボイコット政策を彼は主張したのである。（E, p.34）そして、グリフィスはオーストリア＝ハンガリー二重王政の中に理想の形態を見出したのであった。二重王政はハンガリー人がオーストリアからの独立を達成するための手段・方法であった。オーストリアとハンガリー両国は、それぞれ、立法、行政、司法をそなえた独立国でありながら共通の君主をいただく。両国共同の議会はなく、万事はそれぞれの国内での60人からなる代議員によって決められる。（つまり、ハンガリーの議員はオーストリアの議会に出席することはないのである。）そして、決定事項は相互に文書で相手国に送付するという統治形態であった。（D, pp.34-8）

グリフィスはそのような二重王政を英国とアイルランドの間にも適用させたいと考えていた。つまり、英国とアイルランドはそれぞれ立法、行政、司法権をそなえた独立国として存在しながら、共通の国王を君主としていただく。そして、アイルランドの議員は英国の議会に出席することはない、という形態を。

問題は、英国の王政を認めるということと、非暴力の議会主義という穏健派的な立場にあった。だからグリフィスはイースター蜂起にも参加しなかったし、後にデ・ヴァレラなどの共和主義者（当然、王政を認めない）と意見が対立するし、分裂することにもなったのである。

IRB（=Irish Republican Brotherhood, アイルランド共和主義者同盟）は、それに対して英国の王政を廃止することを目的とする共和主義者の秘密結社であって、武力闘争も辞さないという立場であった。IRBの設立はやや古く19世紀中葉になる。「アイルランド共和主義者同盟、すなわちフィニアン運動は、1858年にダブリンとニューヨークで同時に始まった。ジェイムズ・スティーヴンズ、ジョン・オーレアリー……といった勇ましい人たちの努力によるもので、そのほとんどが1848年の蜂起に関係ある人たちだった。……アイルランド・ナショナリティについてのトーマス・デイヴィスの原理を全面的に容認する一方、フィニアンは、物理的な力によらないかぎりイギリスは独立を

けっして認めないだろうと確信した。そこで、イギリスが不利な立場におちいった時に武装蜂起が始められるようにと、秘密の軍事組織を準備することにした。独立という唯一つの目的に集中した。』⁽¹⁰⁾ IRB は秘密結社であるので入会するのに誓いの言葉をのべなければならなかった。「わたしは全能の神の面前で厳かに誓う。いかなる危険を冒しても生命のつづく限り、アイルランドを独立した民主的な共和国にするために全力をつくすことを。』⁽¹¹⁾ 云々と。それを嫌う人たちもいた。グリフィスは勿論のこと、デ・ヴァレラやコリンズの天敵ブルーアなども IRB の秘密主義を嫌って、途中で脱退している。また、秘密組織なので IRB のメンバーは他の公然とした組織、シン・フェイン党や Volunteers に加入して実権をにぎる政策をとった。

もうひとつ Irish Volunteers というのがある。1914 年に英国がアイルランドに提示した自治法案に、プロテスタント系の北六州が反対して拒否するためにつくった軍事組織 Ulster Volunteers があるが、その軍事組織に対抗するために南 26 州でつくられた「義勇軍」があった。それが第一次世界大戦の勃発で親英派の多数派と、反英派の少数派に分裂する。その少数派の反英組織が Irish Volunteers として残ったわけだが、その執行部を IRB がにぎり、16 年のイースター蜂起の際の中心部隊となったのである。その「義勇軍」が 19 年の対英独立ゲリラ戦争の頃から IRA (=Irish Republican Army, アイルランド共和国軍) と呼ばれるようになっていく。Volunteers は執行部に IRB が多かったし、後に IRA と呼ばれるように、当然ながら共和主義者の軍隊であった。その綱領には共和主義という言葉は含まれてはいないけれども。(cf. B, p.34)

3. イースター蜂起後の状況

16 年の復活祭蜂起は一週間たらずで鎮圧されてしまうのだが、その蜂起がシン・フェイン党をつくったのであって、シン・フェイン党が蜂起を企てたのではなかった。けれども民衆は Irish Volunteers を誤って Sinn Fein Volunteers と呼んでいたので、復活祭蜂起も誤ってシン・フェイン蜂起と呼ぶようになっていた。シン・フェインという名称はいつのまにか自己犠牲と英雄主義の代名詞になっていた。(B, p.125)

その蜂起の指導者の一人である John McBride は蜂起直後に処刑されてし

まうのだが、ブーア戦争にアイルランド部隊を組織して参加し英軍と戦った経験から、蜂起中にGPO（中央郵便局）という固定した場所での蜂起を反省していた。（H, p.154）毛沢東の『持久戦論』によれば、ゲリラ戦の第一段階は防衛的であるべきなのに、イースター蜂起はいきなり第三段階の攻撃的な戦法をとるという誤りを犯していることになる。⁽¹²⁾

話を本論に戻すとして、コリンズも蜂起に参加し、捕らえられ、英国の刑務所に送られる。共和主義者にとっては刑務所は伝統的に様々なことが学べる「大学」でもあったのだが、コリンズは次第に頭角をあらわしIRBを再建しようとする。囚人たちは徴兵されて、前線に送られることを恐れて偽名をつかい、正体を明らかにすることを拒否した。獄中闘争のなかでコリンズは指導者選ばれてゆく。（H, p.55）

蜂起した急進派のIRBは壊滅するが、蜂起に加わらなかった穏健派のシン・フェイン党は組織を温存したとも言えるが、グリフィス自身は蜂起に参加しないにもかかわらず、反英運動の指導者ということで逮捕されてしまう。

蜂起の指導者16人に対する英国の即座の処刑は、アイルランド人を一挙に反英感情に駆りたてた。また、アイルランド系アメリカ人を多数かかえる米政府の反応も英国に厳しかった。英国は世界大戦中で米国の協力を必要としていたので、蜂起参加者の処罰も軽減せざるをえなかった。（その典型がデ・ヴァレラであろう。彼は米スペイン人を父に、アイルランド人を母として、アメリカで生まれたので、アメリカ国籍をもっていた。それで指導者の一人でありながら死刑にならずにすんだのである。）

英首相がロイド・ジョージに替わり、コリンズ、グリフィスらは16年のクリスマスに釈放されて、ダブリンに戻ることができた。コリンズは友人らとIRBの再建に本腰をいれ、やがて再建されたIRBの最高評議会の一員となった。また、蜂起で処刑されたClarke未亡人を中心に設立されたNational Aid Association（救援委員会）にも、IRBは浸透していった。17年2月にコリンズはその書記に任命された。（C, p.38）そこで彼は多くの共和主義者たちと接触するようになった。彼の男性的で、ユーモアがある、おおらかな人柄が多くの人々をひきつけた。そしてコリンズが触媒となって共和主義者の運動が再建されていった。そこには大金が集まった。かつて株屋であり、信託会社の社員であったコリンズは財政能力を一層発展させることができ、後に蔵相になる素地をつくったとも言えよう。⁽¹³⁾

補欠選挙が始まるとシン・フェイン党は、当選しても英下院をボイコットするという方針で、獄中から次々と候補者を立て、民衆の反英感情にのって全員を当選させてしまった。それで英下院に出席する方針をとっていたアイルランド議会党は、一挙に没落してしまい、シン・フェイン党の天下になった。

また、17年早々に Volunteers の臨時大会が開かれ、コリンズは臨時執行部に選ばれた。義勇軍は次第に力をつけ、武器、弾薬などを調達して、山野などをパレードするようになった。(D, pp.71-2) 英国は「アイルランド大会」を開催して事態の收拾をはかろうと思い、既決犯のデ・ヴァレラなどすべての囚人を釈放した。釈放された囚人は一年前の蜂起時とはちがって、英雄としてダブリンに迎えられた。(B, p.158) デ・ヴァレラは獄中での指導者としても注目をあびていたが、釈放されるとすぐに補欠選挙に立候補して当選した。IRB は綱領などを変え、規律を厳格にすることにした。コリンズはその責任者になったので救援委員会の書記をやめ、IRB の専従となった。しかしながら、改組された IRB にデ・ヴァレラなどは加入しなかった。新 IRB をカトリック教会の支配体系に似た秘密組織だと非難して。前回の入会時もデ・ヴァレラは誓いの言葉を言わされるのが嫌でたまらなかった。グリフィスはすでに10年頃に IRB を脱退していたし、天敵ブルーアも秘密主義を批判して IRB の敵対者となっていた。(B, pp.160-1)

シン・フェイン党も釈放された囚人らが中心となって、次第に急進的な立場に変わっていった。党の集会などにはいつも Volunteers が武器は持たなかったが、パレードするようになった。それを英国が弾圧してきた。Ashe などの幹部が逮捕され、ハンストにはいった Ashe は強制的に食べさせられて死んだ。その際に拷問がおこなわれたらしい。Ashe の死はアイルランド人の激しい怒りをかきたてた。彼のダブリンでの葬儀はパーネル以来最大のものであって、数万の民衆が参列し、200人の義勇軍が銃をもって参加した。それはイースター蜂起以後最大の Volunteers の力の誇示であった。コリンズは Volunteers の副司令官の制服で列席してアッシュの墓の上で短い演説をし、ピストルを三発発射した。アイルランド人にはそれで十分だった。とにかくトーマス・アッシュの死は16年の蜂起以上にアイルランドに大きな影響を与えたと言われている。⁽¹⁴⁾

蜂起以後の新シン・フェイン党は左右両派の寄り合い世帯であり、政策を明確にすることが必要となって、17年10月にシン・フェイン党の大会が開かれ

た。党首のグリフィスの主張は相変わらずの議会主義で、北六州の王党派の連中をつなぎとめるためには英国王をいただく必要があるというものなので、IRBはグリフィスを嫌った。(C, p.40)

デ・ヴァレラは蜂起時も最後まで戦った指導者であった。(彼は数学者なので実戦の経験はなかったが、戦略などを理論的に研究していた。)さらに、共和主義者ということでIRBは彼の性格をよく知らぬままに、盲目的にデ・ヴァレラを支持し、グリフィスの追い落としをはかった。(C, p.41) デ・ヴァレラはグリフィスに会い、「党の統一を守るためにはVolunteersとIRBの両組織の支持が得られる自分が党首になるべきだ」と主張して、グリフィスに党首の立候補辞退を求めた。それでグリフィスも党の分裂を避けるために、立候補を辞退し、副党首になった。(H, p.72) グリフィス追い落としの策謀の中心がコリンズであったらしい。それでコリンズは年来の黨員たちの恨みをかい、執行部選挙では最下位であった。そして、フランク・オコナーの解釈によると、デ・ヴァレラはIRBが嫌いなグリフィスに対する感謝というか気兼ね、遠慮から、再建されたIRBに加入しなかった、とみなされているのである。(C, p.43)

大会で採択された新綱領はグリフィス派(王政の承認)とデ・ヴァレラ派(共和制の主張)の意見の対立をたして、二で割ったようなものであった。その要点は、(1)シン・フェインはアイルランドが独立した共和国であることの国際的な承認を求める。(2)しかる後に、アイルランドは(共和制か二重王政かの)統治形態を自由に国民投票によって選ぶことができる、というものであった。その方針の弱点は、アイルランドがもし対英独立戦争に敗ければ、国際的承認など得られるはずがない、という点にあった。(D, p.78) (1)が駄目なら当然(2)も駄目で、アイルランドはなにがなんでも対英独立戦争に勝たねばならぬ、ということになる。

シン・フェイン大会後に、Volunteersの秘密大会が開かれ、ここでもIRBが手をまわしてデ・ヴァレラを議長に選んだ。コリンズは組織部長に選ばれた。(C, p.43)

ダブリン政府(the Castle)はただちにシン・フェインの弾圧を始めた。シン・フェインもその後の北六州の補欠選挙で3連敗した。具体的な政策がないのが致命的だった。(B, p.179)

コリンズは急速に変わりつつあった。民衆の支持を得るためには決定的な行

動が必要だと彼は考えていた。ぐずぐずしていれば革命のチャンスは消え失せてしまうのだ。彼は組織部長として、復活した Volunteers の綱領作成の仕事に課せられた。(D, p.81)

だが、彼は翌 18 年 4 月 3 日、ダブリン政府のスパイ組織の政治部門 (G 部門) によって逮捕されてしまう。それは一種の予防拘禁であった。米国が第一次世界大戦に参加すると、英政府は徴兵令をアイルランドに適用させる法律を英下院に提出してきた。これがアイルランド国民を激怒させた。さすがに英国との合同主義政策をとるアイルランド議会党もあきれかえって、反対にまわり英下院から退席して、ダブリンでのシン・フェイン党などとの徴兵令反対の集会に参加した。労働組合は一日のゼネストをうった。(B, p.185)

Volunteers の執行部は、徴兵令のアイルランドへの適用はアイルランド人民に対する宣戦布告であるとみなして、武力でもって反対するのが義務であると考えた。(B, p.186) それで獄中にいたコリンズは Volunteers の原則に反して、保釈金を払って出獄した。彼は義勇軍の軍務局長になっていたからだ。徴兵法反対運動をつらぬくには武器を集める必要もあった。また、組織部の仕事とともに情報部の仕事も始めるようになっていった。要するに、コリンズは Volunteers の実権をにぎっていたのである。

“Irish Volunteers” という題名の機関紙が出版され、コリンズはその巻頭言で正規軍の戦いを断念して、ゲリラ戦に徹するよう主張した。(B, pp.205-6)

1. Forget the company of the regular army. We are not establishing or attempting to establish a regular force on the lines of the standing armies of even the small independent countries of Europe. If we undertake any such thing we shall fail. Our object is to bring into existence, train and equip as riflemen scouts a body of men, and to secure that these are capable of acting as a self-contained unit, supplied with all the services that would ordinarily be required in the event of martial action *in this country*.

2. Remember that we have to depend on the good-will, mutual confidence, and instinctive patriotism of the men for discipline and service.

英当局はその機関紙に怒り狂い、なんととなく印刷所の搜索をおこない、弾

庄した。さらに、その機関紙を所有している義勇兵は軍法会議にかけられ、重禁固刑に処せられると脅した。(B, p.210)

英国のダブリン警察の政治部門が政治スパイの中心勢力だったが、その敵方の警部の何人かがコリンズに内通してきて、ダブリン政府の情報をもたらすようになった。その内通者を通じて、ダブリン政府が企てているシン・フェイン党などの逮捕予定者の名前を知ると、5月中旬コリンズは会合の席上でデ・ヴァレラなどに逮捕されないようにと警告したのだが、無視されてしまい、その晩コリンズを除いてほとんどすべてのシン・フェインの幹部が80人以上も逮捕されてしまった。それ以来コリンズは逃亡生活をつづけるわけだが、ダブリン政府はその逮捕は「ドイツとの陰謀」によるとの声明を出したが、それが真っ赤な嘘で、徴兵法反対運動をつぶすための弾圧であることは明白であった。シン・フェイン党をつぶせば、徴兵令を施行できると英政府は考えていたのであろう。(B, pp.188-192) コリンズはその後なんどもダブリン政府の襲撃をうけるが、奇跡的に逮捕をまぬがれ、友人宅を転々として暮らした。彼は変装することもなく、ボディ・ガードもつけることなく、市内を自転車で走り、活動をつづけた。(B, p.192) 幹部の逮捕後は Harry Boland がシン・フェイン党を、コリンズが Volunteers を指揮することになった。(D, p.88)

18年11月に第一次世界大戦が終わり、徴兵令の問題は自然消滅になったが、それでもなお英政府は弾圧をやめず、デ・ヴァレラなどの幹部は釈放されないどころか、さらにシン・フェイン党本部が700人もの英兵の襲撃をうけたりした。(B, p.240)

12月に英国の総選挙がおこなわれ、植民地アイルランドでも選挙がおこなわれた。その結果は総数105のうちシン・フェイン73(そのうち獄中者34)、英国との合同をめざす北六州のユニオニスト26、アイルランド議会党6、その他であった。英国との合同維持を志向するアイルランド議会党は80議席からたったの6議席に転落して、完全に勢力を失い、英国からの分離・独立を志向するシン・フェイン党が圧勝した。それはコリンズらのIRBトリオが取りしきった選挙で(F, p.36)、コリンズも勿論当選している。非合法組織のシン・フェインの勝利は1800年の「アイルランド併合法」を事実上終わらせるものであった。(D, p.86)

4. 国民議会の創設と独立戦争の勃発

18年暮れの選挙に大勝したシン・フェイン議員は英国のウェストミンスター下院に行くことを拒否して、19年1月にダブリンで初の Dail Eireann (アイルランド議会、以下、国民議会と称す) を開催した。北六州のユニオニストなどは当然出席せず、また獄中者も出席できなかったので、出席者は政治活動に不慣れな者 24 人であった。Brugha (ブルーア) が会議を主宰した。まず独立した共和国の樹立のために献身するとの誓いがのべられ、次いで、16年のイースター蜂起の際に宣言された「共和国」の樹立が、改めて宣言され、批准された。IRB が密かに「共和国」を維持してきたという理由で。さらに、第一次世界大戦後のパリ平和会議に、アイルランド共和国の承認を求めるための代表団を送ることが決められた。5人の閣僚からなる内閣が組織され、デ・ヴァレラが首相(獄中なのでブルーアが代行)、コリンズは内相に選ばれた。(D, p.98)

しかし、実際はコリンズは初の国民議会に出席していなかった。定足数の1/4以下の少数の議員の出席で決めるような議会には反対だったし、デ・ヴァレラを脱獄させるために英国にいたからである。デ・ヴァレラ派の共和主義者として名高いフランク・オコナーに言わせれば、このような会議こそその後の諸悪の根源ということになる。「この独立宣言から、わたしが思うに、その後の年月のすべての災害、つまり、分裂、無政府主義、文化の崩壊が生じた」からである。(C, p.58) それは挑発と宣伝のための会議にすぎなかった。(F, p.37)

また、ウィルソン米大統領が「アイルランド共和国」の承認を拒否すると、英政府はアイルランド国民議会を弾圧してきたので、それは「亡命」政権となってしまった。(E, p.110)

ところで、アイルランド独立戦争の最初の出来事は1月21日国民議会の最初の日におこったと言われている。その日、地方で二人の RIC (警官) が Volunteers の待ち伏せ攻撃に遭い殺された。(E, p.53) 1月31日発行の Volunteers の機関紙は次のような「宣戦布告」をのせている。(B, pp.274-5)

Dail Eireann, in its message to the Free Nations of the World, declares a 'state of war' to exist between Ireland and England, a

fact which has been recognised and acted on by the Volunteers almost from their inception; it further declares that state of war can never be ended until the English military invader evacuates our country. (中略)

Every Volunteer is entitled, morally and legally, when in the execution of his military duties, to use all legitimate methods of warfare against the soldiers and policemen of the English usurper, and to slay them if it is necessary to do so in order to overcome their resistance. He is not only entitled but bound to resist all attempts to disarm him. In this position he has the authority of the nation behind him, now constituted in concrete form.

2月3日、コリンズはデ・ヴァレラの脱獄を成功させた。デ・ヴァレラは暫く英国に潜んでいたが、3月に英政府が「ドイツの陰謀」事件の囚人全員に大赦を与えたので、デ・ヴァレラも帰国することができた。その後もコリンズは仲間をなにとなく脱獄させている。(H, p.100)

4月1日、再びアイルランド国民議会が開かれ、前回の閣僚は辞任し、デ・ヴァレラが首相に、コリンズは蔵相に選ばれた。他の閣僚は左右両派のバランスをとって決められた。しかし、それは英国のダブリン政府の統治機構の中に、別の新しい統治機構をつくることであり、困難なことで、現実にはまったく機能しない部門もあった。コリンズは国内の資金調達を担当することになっていた。コリンズはデ・ヴァレラに失望した。彼は万事が愚図な男で瑣末主義的で、行政能力がまったくなかった。(C, p.68) よく言えば、控え目で、学者風で、冷たく、自制的だった。(H, p.207) おまけにデ・ヴァレラはアメリカに行きたいと言い出した。大赦令が出たのだからアイルランドにいても逮捕される恐れはないのに。

不可解なことにデ・ヴァレラは建国の資金を集めるために、またウィルソン大統領のアイルランド共和国承認を得るためにも、米国に行きたいと強く主張し、ついにアメリカに旅立ってしまう。一国の首相兼元首だから大統領ともいふべき人間が建国早々の国を一年半も留守にして、外国に滞在するというのは異常と言うほかない。そのくせ3年後の対英アイルランド条約の交渉の時には、大統領は象徴として自国に居つづけなければいけないと言って、決して交渉団の責任者としてロンドンに行こうとしなかった男なのだ。

議会では RIC (アイルランド警察) を追放することが決議された。RIC は普通の国の警察官とちがって、ライフル銃を携帯し、自宅ではなくて兵舎のような宿舎に住んでいたの、軍隊に近かった。RIC は英国のアイルランド支配の先兵として、恐怖政治を引きおこした張本人だった。(B, p.319) その警官の住む宿舎への攻撃、地方での Volunteers の待ち伏せ攻撃、ダブリンでのスパイなどによる情報戦争が始まった。コリンズは蔵相と Volunteers の GHQ (総司令部) の一員であり、軍務局長のポストなどは手放したが、情報部の任務が加わり、さらに IRB の仕事があったので、一層多忙になった。ダブリン政府の警官に対する攻撃は完全な戦争状態になるので、19 年中頃には彼は IRB の最高評議会の議長になった。(F, p.39) だが、英政府は戦争状態が存在するとは決して認めようとせず、普通の犯罪事件がおこっている振りをした。(E, p.111)

ダブリン政府の情報部にいる警部や、郵便局や税関の職員、鉄道員、船乗り、はては刑務所の看守まで様々な人が、Volunteers の情報部長のコリンズに協力するようになった。(D, pp.114-5) 郵便局は政府の公文書などを取り扱うし、船乗りは武器の密輸入に協力してくれる。しかも、そのような協力者の大部分がコリンズとは一面識もない人々なのだ。(B, pp.217-221) このような愛国者を相手にしては英国とて勝てるはずもない。

「英国は宣戦布告をするのを嫌がったので、戦いは二つの秘密情報部の戦いとなった。義勇軍はトラックを待ち伏せ攻撃したり、警官の宿舎を攻撃した。英兵は大規模な捜索をした。けれども、双方の何千人という兵士は怒り狂って発砲することはしなかった。真の戦士は郵便局員や電話交換手、ホテルのポーター、暗号の解読者であった。」(C, p.119) とオコナーは書いているが、案外これが実情かもしれない。

だが、4月のリムリック州の事件が大きな反響をひきおこした。入院している仲間の Volunteers の囚人を救出しようとして、武装した Volunteers が病院に押し入り、護衛していた警官隊と撃ち合いになり、双方に死者のでた事件だった。リムリック州にはただちに戒厳令がしかれた。また、Volunteers がコーク州の警官の宿舎を襲い、ライフル銃や弾薬を奪う事件がおこった。(B, pp.309-10)

ダブリン政府は必死になって、国民議会政府を潰そうとしてきた。英兵や警官による逮捕、襲撃、ある地域を戒厳令下におくこと、集会やコンサートなど

の禁止、新聞、雑誌などの発売禁止など、ありとあらゆる強制手段がとられた。(B, p.336)

それに対して Volunteers も必死になって反撃した。相手のスパイ網を壊滅させることが先決だった。それで、7月下旬には国防大臣ブルーアの承認の下に、初めて公けにダブリン政府のスパイが射殺された。その男は何度か警告を受けながらもせせら笑っていたので処刑されたのだった。

だが、コリンズは次第にシン・フェイン内閣（デ・ヴァレラ渡米後はグリフィスが大統領代行となる）の穏健政策に敵対的になっていった。彼らは武力闘争を嫌い、ますます政治的、理論的になっていくばかりだったから。(D, p.103) シン・フェイン政権とコリンズ IRB との二本建て権力の傾向さえみられるようになった。以下、拙著『IRA』（彩流社、p.801）からの引用をお許し願いたい。

「義勇軍は国民議会に対する忠誠を求められ、国民議会の統制下に入ることを求められた。しかし中央の国民議会政府の威光の及ばない地方——特に南西部では、義勇軍の大多数のメンバーがシン・フェイン党や国民議会から独立した状態で、民衆の軍隊や警察の役割を代行し、英国側の警察との対立、戦いが発生していた。

大半の義勇軍は多数の決議に反しても、国民議会の統制下に入ろうとしなかった。それは対英武力闘争の放棄につらなりかねなかったからである。

すでにこのとき、コリンズを中心に再編成された IRB では文官統治の原則が否定され、軍独自の執行部を持ち、18年8月からは IRB の機関紙が発行されていた。IRA（アイルランド共和国軍）という名称もその機関紙で初めて用いられたという。」

コリンズはダブリン政府内の内通者と毎週会うことにし、敵の情報などをすべて聞き出した。逮捕、襲撃の情報は勿論のこと、組織、方法、展望、意図なども。また、暗号や秘密文書もコリンズの手に入った。(B, p.333) 更に、コリンズは自前の情報網をつくった。ダブリン政府内で働いている人々の中に協力者を見つけることは、それほど困難ではなかった。英兵の将校や英本土の政府や警察本部の中にさえ協力者がいた。(F, p.49) 民間人の中ではすでに述べた鉄道員、郵便局員などのほかに、行商人に頼ることが多かった。彼らは怪しまれずに動きまわることができたからだ。(D, p.114)

ここから蔵相としてのコリンズの側面にも触れておかねばならない。新国家

建設のための資金集めの仕事に関しては、(B)の著作の17章に詳しく書かれている。それによると、コリンズはアイルランドのいくつかの地域にそれぞれローン担当の責任者を置き、彼らに仕事を任せて毎週報告を受けるシステムにしていた。しかし、ダブリン政府は国民議会政府のローンを違法としたので、小切手の宛名が「大蔵大臣」では銀行が換金してくれなかった。後難を恐れて、名前を明記して送金することを嫌がる人もいた。事務所などが英当局の捜索などをうければ、身元がばれるからだ。それでコリンズはなるべく金(きん)で資金を貯えようとしたのだが、金の輸送にはまたそれなりの困難が伴うのであった。ローンに関して交わされた、渡米中のデ・ヴァレラ大統領とコリンズ蔵相の往復書簡もいくつか載せられている。(B, pp.330-359)

また、20年6月の閣議では、グリフィス大統領代行は資金集めに関しての蔵相コリンズの功績を褒め讃えている。(F, p.40)

5. 戦争の激化

19年の後半に独立ゲリラ戦争は一層激しくなっていた。そして、ダブリン政府の弾圧や迫害にもかかわらず、国民議会政府はしだいに権威を増していった。

地方ではVolunteersの警官の宿舎に対する攻撃がおこなわれ、武器、弾薬の略奪がおこなわれた。また、パトロール部隊への待ち伏せ攻撃がおこなわれたりした。例えば、9月には、コーク州のある町で初めて英兵とVolunteersが交戦した。17人の英兵がIRAに襲われ、ライフル銃などを奪われ、英兵が一人死んだ。その夜、英兵は報復をした。コーク州のその町を襲撃し、暴虐の限りをつくして、街を破壊した。(B, p.338)

ダブリンではコリンズによってSquad(暗殺団)がつくられた。それは専従で、有給のエリート部隊で、宿舎に住み、コリンズの情報部と直結していて、テロなどの危険な仕事を担当するものだった。(D, p.128)すでに述べた7月下旬の英スパイの射殺につづいて、9月12日、11月30日、12月14日とダブリン政府の情報部の警部が射殺された。(F, p.45)

国民議会政府のダブリン政府の警官追放政策によって、警官は殺されたり、恐怖心から辞職する者もでた。また、新しい警官の募集が困難になり、辺鄙な場所の宿舎は空き家になって閉鎖されたりした。(B, p.384) IRAは空き家の

宿舎を火をつけて焼いたりした。再び使用されることを防ぐためもあったが、IRA の力の誇示のためでもあった。(F, p.58)

9月に国民議会や Volunteers や IRB などが危険団体とみなされて非合法化された。それらの団体は地下に潜るほかなかった。そのような弾圧は国民議会派の人間には、ダブリン政府による宣戦布告に思えた。議会主義が駄目なら、武力闘争しか方法がないと皆が悟った。武闘派のコリンズの登場となった。(D, p.122)

20年は恐怖の年だった。1月には地方選挙がおこなわれ、そこでもシン・フェイン党が大勝した。各地で地方議会がダブリン政府を離れ、国民議会に忠誠を誓ったので英国はショックをうけた。(B, p.445) 北六州でもシン・フェインが勝利したので、極右のプロテスタント過激派は ballot (投票) から bullet (銃弾) へ、つまり、議会主義から武力主義へと方針を転換し、武力で北六州の南 26 州からの分離を維持しようとした。(H, p.123)

2月下旬に英政府はアイルランド統治法案 (= 分割法案) を提出して、北六州の分離をはかった。それ以降北六州での少数派カトリック住民に対する弾圧は激しく、家を焼かれたり、脅迫をうけたりして、5,000 人ものカトリック住民が家庭や職場から追い出された。(D, p.161) また、ダブリンに夜間外出禁止令が出され、ダブリンの人たちは日常生活が戦いの場になっていった。(D, p.134)

3月に英政府はアイルランドの建直しをはかり、北六州から強硬派の司令長官を移入し、さらに、Black and Tans と呼ばれる部隊を導入して IRA の壊滅をはかろうとした。その部隊は「黄褐色の制服に黒のベルトといういでたちで、この一隊は大戦から復員してきた将兵で編成されており、凶暴の限りを尽くした集団として今も語り草になっている」⁽¹⁵⁾ ほど悪名高かった。

18年末、まだ独立戦争前に (その 18 年だけでも 1,000 人以上のアイルランド人が逮捕され、91 人が国外追放されているのだが)、アイルランドにやって来た英国の作家 Chesterton は、「わたしの最初の一般的な、視覚に訴える印象は、その島が緑ではなくて茶色、カーキ色で茶色になっていることだ。」(D, p.95) と書いているが、Black and Tans が導入された今ならばなんと言うであろうか。「黒と黄褐色の島」とでも呼ぶであろうか。

3月20日、コーク市長が武装して顔を隠した一団に自宅で襲われ、妻の面前で殺された数日後、その地の警部がポルトガルのリスボンまで逃げたが、

コークの Volunteers に追われ、射殺された。(B, pp.430-1)

4月の復活祭には恒例の蜂起の記念祭がおこなわれるが、その年は各地で列車が止められ、道路が遮断されたりした。(D, p.137) IRA は各地の税務署を襲って焼き打ちし、書類を燃やしてしまったので、数ヶ月間は税金の徴収ができなくなった。(B, p.435) また、各所でダブリン政府の行政が麻痺し始めてきた。警官が不在となり、IRA が代行したり、英政府の法廷に代わって、国民議会の法廷が賑わうようになってきた。(B, p.427)

8月末までに556人の警官が辞職し、313人の判事が辞任した。(B, p.48) Black and Tans に対する怒りから、陪審員に選ばれた市民が法廷に出席することを拒否して、裁判が成りたたなくなっていた。(B, p.34)

Black and Tans よりも恐ろしい Auxiliaries (補助部隊) も導入された。今や、ダブリンは完全に戦場になっていた。IRA がまさるのは宣伝と情報活動だけだった。コークはダブリン以上に激しい戦いがおこなわれた所だった。夏にはコーク市にも夜間外出禁止令が出され、家主はその家で眠っている者(=住んでいる者)の名前をドアに張り出すように強制された。捜索や発砲事件は日常茶飯事になっていた。(D, p.153)

数ヶ月前に殺害されたコーク市長の後任の Terence MacSwiney が IRA の会議を主宰していて逮捕された。即座に抗議のために彼はハンガー・ストライキにはいった。他の10人の仲間の囚人と一緒に。それはアイルランド史上最も有名なハンストになった。

この頃、地方ではパート・タイマーの Volunteers の中から専従の flying columns (遊撃隊) がつくられていた。それは粗末な武器をもった数人から十数人までの部隊にすぎなかったが、偵察、待ち伏せ攻撃、奇襲攻撃、なんでもござれで、5,000人もの英兵を釘づけにすることができると言われた。(D, p.164)

ロンドンに移され、ハンスト74日にして10月25日コーク市長 MacSwiney は死んだ。その間アイルランド中の人間が苦悶した。「卓越したひとりのアイルランド人が、自国の自立する権利を強調するために故意に死の道を選んだのだ。多くのアイルランド人にとっては共和国はもはや単なる努力すべき理想ではなくて、犠牲によって矮小化されえぬ信仰になってしまったのである。」従来シン・フェインを不可能な要求を押し付けようとする、銃をもったテロリストとみなしてきた普通の英国人も認識を改めざるをえなかった。(D, p.165)

彼の葬儀の行列はロンドンを通り抜け、そこから柩は直接コーク市に運ばれた。31日アイルランド中が喪に服するなかで5,000人の参列者とともに盛大な葬儀がおこなわれた。

翌11月1日、拳銃をもっていたために18歳の医学生 Kevin Barry が絞首刑に処された。それは1803年の Robert Emmet の処刑以来初めての政治的な処刑であった。18歳という若さが民衆の涙をそそり、怒りをかきたてた。“Kevin Barry” という題名の反逆の民衆歌がつくられた。バリーの死後多くの若者が IRA に加入したという。⁽¹⁸⁾

11月21日の朝、15人の英兵などがダブリンの宿舎で殺された。それは英当局のスパイ組織を壊滅させるためのIRAの襲撃によるものであった。それ以前からコリンズの周辺にはスパイが、とりわけカイロから送りこまれたので「カイロ・ギャング」と呼ばれたスパイがたむろしていた。その前夜もコリンズらが集まっていたホテルが英国の補助部隊の襲撃をうけた。コリンズは辛うじて逮捕をまぬがれたが、仲間が三人逮捕されてしまった。それでダブリン政府のスパイ組織を破壊することが決められたのだ。(B, II, pp.84-6) 殺されたのは、そのような情報部の英兵だった。彼らはさっそく報復にうつってきた。その日曜日の午後、フットボール場にトラックで乗りつけた補助部隊らは、殺人犯の Volunteers が逃げこんだといって、無差別に群衆に発砲し、選手をふくめて14人が殺され、60人以上が負傷した。また、その夜遅く、土曜日の晩に逮捕された Volunteers が三人、英国支配の拠点であるダブリン城で処刑された。(B, II, p.86, D, pp.172) コリンズは友人の死を悲しみ、義勇軍の軍服をきて葬儀に参列した。(D, p.174)

ダブリン政府はただちに弾圧にのりだしてきた。夜間外出禁止令が毎晩出され、英兵などの徹底したパトロールや捜索がおこなわれ、大量の逮捕者が出た。大統領代行のグリフィスら幹部も逮捕されてしまった。今度も逮捕をまぬがれたコリンズが30歳にして大統領代行をつとめることになった。(D, p.174)

その当時は英国の正規軍が50,000人、Black and Tansなどが15,000人も投入されていた。(B, II, p.96) それでも一週間後の11月28日、英国のリバプールでIRAによって15の倉庫が燃やされた。同じ日、コーク州で flying columns (遊撃部隊) の待ち伏せ攻撃にあって、英国の補助部隊17人が殺されるという事件がおこった。その報復として、12月11日、Black and Tans がコーク市を襲い、略奪し、火をつけ、街の中心部を炎上させた。市役所など

も焼け落ちた。それがまたアイルランド人を激怒させた。(B, II, pp.103-4, F, p.63) アイルランド南西部には戒厳令がしかれた。(F, p.70)

また、12月23日にアイルランド統治法(=分割法)が成立し、北アイルランドが南26州から分離した。

ロイド・ジョージ英首相は20年初頭からの強硬政策が失敗したのを知ると、様々な仲介人を持ちいて、12月頃から秘密の和平交渉をコリンズと始めた。(B, p.107) だが、ロイド・ジョージの態度は高圧的であった。IRAなどの過激派は解散すべしとか、南26州に戒厳令をしくとか、武器の譲り渡しなどを要求してきた。コリンズは勿論のこと、獄中にいた穏健派のグリフィスも、それは休戦ではなくて、降伏の要求だと反対の意見をのべてきた。コリンズらの国民議会の休戦条件は、まず英兵の撤退であった。(B, pp.121-130) 様々な交渉の後、休戦の条件として、IRAの武器の保持と、コリンズの逮捕の免責があげられた。(H, p.196)

クリスマス・イヴの閣議で、ロイド・ジョージ英首相はコリンズは有能な男であるが、殺人の組織者なので交渉相手にできない、と声明した。(H, p.198)

その日、偶然の一致かタイミングよくデ・ヴァレラが滞米1年半で帰国した。そして、再び大統領に復帰した。コリンズが生命をかけてアイルランドで戦っているのに、デ・ヴァレラは妻子を置いて(その間コリンズが面倒みていた)、渡米して若い女性秘書と豪華なツアーをしていることがとかく噂になっていた。それでコリンズを支持する者もでた。(H, pp.192-3) デ・ヴァレラの行動にはいつも不可解さがつきまとう。今回の突然の帰国もそうだが、節目、節目の大事な時期にいつも奇妙な行動をとるのだ。グリフィスのような理論家でもないし、コリンズのような軍人でも実践家でもない。そのくせいつも権力の頂点にいるという不思議な人だ。歴史に仮定の話は禁物だそうだが、もし仮にこの人がいなければ、その後の内戦もおこらなかったであろうし、現在に到るまでのIRAの問題ももっと違っていただろうと思われる。無駄な血は流されずに済んだと思われるのだ。この人の行く所はアメリカであれ、アイルランドであれ必ず組織の分裂がおこるのだから。

6. 大統領デ・ヴァレラとの対立

1921年、戦いはまだまだつづく。英国はコーク市焼き打ち事件後から「公

式の報復」政策へと方針を変更させた。襲撃や逮捕はつづき、街頭や到るところで両手を上げさせての身体検査がおこなわれた。(B, pp.153-4) 大砲の音や銃声は昼も夜もありふれたものになり、人々はピストル、ライフル、機関銃、爆弾の音を区別できるようになった。(B, p.158)

しかし、紙数がない。詳しくはいつか書くであろうデ・ヴァレラ論にゆずるとして、以下ごく大雑把に話を進めたい。デ・ヴァレラは帰国すると、英国に嫌われているコリンズを渡米させようとしたが、閣僚のほぼ全員に反対された。そんなことをすれば敵前逃亡に等しいからだ。(C, p.205) やがて、コリンズとデ・ヴァレラの路線の違いが表面化した。デ・ヴァレラは戦争をゲリラ戦ではなくて、正々堂々とした正規軍の戦いにしたかった。彼は、警官を射殺したり、英兵を待ち伏せ攻撃したりすることは海外での評判を悪くするからやめること、ゲリラ戦は民衆が残酷な報復をうけ、負担をかけるのでやめること、その代わりに500人規模での正規戦をすること、を提唱した。(C, p.132, E, p.78) もっともらしいというか、実情を知らないとんちんかんな提案だが、従来のコリンズ路線を否定するものであることは確かだ。

その提唱が5月25日のダブリンで最も美しい建物のひとつである Custom House (税関) への攻撃を導いた。120人ほどのIRA兵士が参加した。80人ほどの兵士が昼に建物内に突入し、石油をまきちらして火をつけて、建物を炎上させた。外にも残りの兵士がいて、トラックに乗って駆けつけた英国の補助部隊に爆弾を投げつけた。それは確かに独立戦争のなかで最大の戦いであり、IRAの力の誇示になったかもしれないが、損害も大きかった。大多数の者は炎上する建物のなかで、どうしようもなく降伏した。6人の兵士が死亡し、12人が負傷、70人余が捕虜となった。コリンズは勿論その作戦には関与しなかったが、優秀な人材を多数失ったことを悲しんだ。(B, II, pp.200-1)

6月22日の北アイルランド議会の開会式での英国王の和平を勧める演説が、新しい平和交渉を導いた。さっそく30日にグリフィスが釈放され、英国との交渉に加わった。(E, pp.58-9) 7月11日正午から休戦が実施された。10月11日からはロンドンで両国代表による平和交渉が始まることになった。デ・ヴァレラは何故か代表団に参加せず、グリフィスを団長にし、コリンズも加えられた。コリンズは自分は軍人であって、政治家ではないから交渉は苦手だと固辞したが、認められなかった。グリフィスは50代になっており、長年の働き過ぎや貧困や牢獄入り、緊張などで疲れ果てていたため、コリンズが事実上

の団長だった。(H, p.233)

実は、それ以前に休戦成立の翌日、デ・ヴァレラはロンドンに行きロイド・ジョージ英首相と会談をしている。噂によると、英首相はアイルランドにカナダなみの自治領——それも海軍をはじめ、軍事的には英国に協力するという条件付き——を提示した。共和国はインドや他の自治領に政治的影響を与えるから、と拒否された。するとデ・ヴァレラが、「大統領のわたしが共和国が無理と知っててどうして交渉に来れますか」と泣きつくと、ロイド・ジョージは「あなたが来る必要はない。他の者を来させなさい。」と言ったという。それだけにコリンズは、交渉団、とりわけ自分は生贄だと感じた。(I, p.39) 彼が交渉団に加えられたのは、彼の軍人としての名声を失わせるための、デ・ヴァレラ、ブルーアなどの政敵の畏だとコリンズは思った。英国との交渉の過程でいつかはグリフィスと仲違いするかもしれないし、ダブリン残留政府とも意見が異なるようになれば、コリンズは完全に孤立することになる。それどころか彼の政敵はコリンズの軍事的名声や政治生命だけでなく、文字通りの生命を狙っているのかもしれない。そう思うとコリンズはぞっとした。(C, p.163 脚注) さらに、アイルランドの代表団には二人の元英軍将校と二人のスパイがいたのである。(I, p.43)

交渉団は Draft (A) と (B) の二つの草案を準備していた。Draft (A) にはデ・ヴァレラの持論の External Association (外面的連合) が記されており、Draft (B) は英国との交渉が決裂した時の宣伝用であった。External Association はデ・ヴァレラの造語だが、要するに英国はアイルランド問題に関しては一切干渉せず、自立を認めるが、アイルランドは対外的には英連邦諸国と対等の付き合いをするというものであった。(G, pp.57-8) もっと単純に言えば、アイルランドは英連邦としては dominion (自治領)、国内的には republic (共和国) というものであった。(C, p.162) そして、自治領住民のもつ common citizenship ではなくて reciprocal citizenship (互惠市民権) を主張した。つまり、アイルランド人は Irish subject だが、自治領に住むかぎりは British subject と同じ権限を持つというのだ。それは実質的な相違はないが、象徴的な相違があるとデ・ヴァレラは主張した。(G, p.58) それは英国王への忠誠の誓言の拒否にも通じるからだ。しかし、その主張は英政府にもよく理解できなかつたらしい。(E, p.169)

11月30日に英政府から条約の草案が交渉団に提示された。その内容は

Irish Free State であった。それは「法律的にも実質的にも」dominion（自治領）と同じものとされた。ただし例外として、貿易と防衛に関して制限があった。自治領とのもうひとつの相違は、「自由国」と英帝国の長としての国王への宣誓の形式であった。さらに、その条例は北アイルランドにも適用されることになっていて、国境委員会の設立がうたわれていた。(G, p.79)

対英条約には実は北アイルランドのことが絡んでいたのである。それは表面には現れないが、常に両者の念頭に置かれていた問題で、事態を複雑にしていた。事実上の三ヶ国間の条約と言ってもよいくらいであった。要するに、条約の基本的な問題点は、(1)英国王への忠誠の誓言と、(2)北アイルランドの地位、に尽きた。それは二律背反というか、アイルランドが共和国を主張すれば北アイルランドは南 26 州から離れてしまうし、二重王政を認めて英国王への忠誠を誓えば、南 26 州のもとに戻って来るかもしれなかった。コリンズらの交渉団は国王としてではなくて、the Associated States の長としてなら認めると主張したが駄目だった。(C, p.162)

コリンズはもし条約を締結することを拒否すれば、遅かれ早かれ再び戦争になるだろうと思っていた。戦争再開がアイルランド側には無理なことはコリンズが一番よく知っていた。それにアイルランド国民に条約賛成か反対かを定める機会も与えずに、条約を潰すことは犯罪的に思えた。コリンズはアイルランドは自治領の地位から利益をうけることを確信していた。自治領は「最終的な解決に近いもの」とは思わなかったが、「それは最初の第一歩だ。これ以上のことは期待できないだろう。」とコリンズは書いている。(G, pp.102-3) コリンズは大いに悩んだが、ついに条約に調印することに決めた。その時のコリンズの苦悩の有り様を、英国側の交渉団の一員であったチャーチルは次のように書いている。「マイケル・コリンズはあたかも誰かを、恐らくは自分自身を、射殺するような様子で立ち上がった。わたしの生涯のなかで、これほど抑制された苦痛と苦悩を見たことがなかった。」と。(H, p.274)

これ以後は本当に大急ぎで話を進めなければならない。条約の調印は 21 年 12 月 6 日におこなわれた。交渉団は全権限を与えられていた。それなのにデ・ヴァレラは条約の調印に反対した。12 月 14 日から国民議会で条約の審議が始まった。デ・ヴァレラは Document No.2 (条約を No.1 として) という対案を提出した。それはデ・ヴァレラ自身も認めるように条約と大差のないものであった。(G, p.119) 一般大衆も相違点が分からず、何を大騒ぎして議論

しているのか理解できなかった。(H, p.303) それはすでに英国との交渉の過程で提出され、拒否されたものに等しかったからだ。(G, p.121)

22年1月7日、国民議会で採決がおこなわれ、64対57の僅差ながらも条約が可決、批准された。戦争が終わったことを民衆は歓呼の声をあげて歓迎した。(C, p.181) デ・ヴァレラは大統領を辞任し、退席した。代わってグリフィスが大統領に選ばれ内閣を組織した。14日には条約賛成派が臨時政府を樹立し、コリンズがChairman(議長)に選ばれた。グリフィスは国民議会の大統領に残った。(H, p.310) つまり、この時期にはアイルランドには4つの政府が存在したことになる。北アイルランド政府、そして共和国の名において設立されたが、死滅しかけている国民議会政府と、条約によって「アイルランド自由国」が樹立されるまでの選挙管理内閣としての臨時政府、それに非合法のものだが反条約派の政府。だが、二番目と三番目の政府は実体は同じようなもので、閣僚なども重複していて、合同して会議などを開いた。その課題は憲法の制定と条約の賛否を問う選挙の実施であった。

16日にはコリンズはダブリン政府から政権の委譲をうけた。英兵の撤退が始まり、兵舎が手渡され、政府が置かれた市庁舎にはアイルランドの三色の国旗が翻った。(B, p.372)

7. IRA の分裂と北アイルランドの惨状

英軍が撤退した今、残された軍隊はIRAだけだった。そのIRAが条約賛成派と反対派に分裂してしまうのである。事態はますます無政府主義的になっていった。Volunteersからコリンズの影響力を削ぎ落とそうとする国防大臣ブルーアの19年8月の提案に、デ・ヴァレラが同意して、義勇軍のメンバーは20年8月以来、国民会議と共和国に忠誠を誓うようにさせられていた。(E, p.115)そしてVolunteersは正式にIRA(アイルランド共和国軍)として認知されていく。だが、その国民議会がデ・ヴァレラ派の退席によって分裂し、大統領が二重王政主義のグリフィスの手に移ってしまったのだから、IRAの中から穏健派になってしまった国民会議に忠誠を誓うことをためらう部分が出てくるのも当然であろう。それに実体として国民議会の議員は大部分がIRAの高官でもあったのだから、国民議会の分裂がIRAの分裂を導くのも避けようがなかった。分裂はIRAを育ててきたコリンズにとっては痛手であ

あったことは言うまでもない。

条約賛成派のIRAは制服を与えられ、兵舎に住んで、自由国軍となり、一部は予備兵にまわった。(B, p.372) 条約反対派は武力に訴えても反対をつらぬくという態度をとった。

休戦中にIRAの兵士は急増していた。彼らは主として田舎で農作業をしていたり、働いていたり、勉学中の若者から成り立っていた。武器、弾薬は公然と密輸入されていたので豊富にあった。彼らはいままで英兵と一度も戦ったことのないような連中だった。(D, p.295) 問題は彼らを評価するか否かであろう。オコナーは次のように言って彼らを弁護している。「将校も兵士もみんな若かった。彼らは山賊でも人殺しでもなかった。彼らには下劣なところも、不徳義なところもなかった。彼らは田舎の農場や教室を抜け出してきた、元気がよくて、気前のよい、冒険心に富んだ少年たちにすぎなかった。田舎では10年間も気前のよさや、冒険心、進取の気性、独創的な想像力が無慈悲に抑えつけられていたからである。彼らはピストルやライフル銃によって可能にされる、無責任で、ロマンチックな、威張りちらす生活を享受していた。」(C, p.190) 勿論、彼らを評価しない立場の人もある。

22年1月下旬ロンドンで北アイルランド首相Craigとコリンズは面談し、協定をむすんだ。国境委員会の設置と、ベルファースト製品の排斥をやめる代わりに、カトリック教徒の復職、弾圧の軽減などをコリンズは訴えた。(E, p.133) しかし、その協定は一週間で破棄され、Craig北首相は北アイルランドの南26州への復帰を拒否し、また国境委員会の不利益な決定にも反対すると通告してきた。その後南北アイルランドの国境付近で戦いがおこり、以後南26州での6月の内戦の勃発まで約4ヵ月、北アイルランドの警察や特殊部隊、プロテスタント過激派は荒れ狂い、暴虐のかぎり尽くした。彼らは毎晩のようにカトリック住民を襲い、放火、殺害をくりかえした。(C, p.186)

「憎しみと頑迷さがその地域を支配し、特にベルファーストを大虐殺と恐怖で満たした。ファシストに導かれた暴徒たちは街頭をうろつき回り、カトリック地域を破壊しながら男や女や子供たちを殺したり、家から追い出したりして、家族を家のない避難者として数ヵ月にもおよぶ長い放浪の生活に追いやった」(D, p.289) のである。それは高度な政治的意図にもとづくもので、カトリック住民を殺害することによって、南26州を内戦、さらには対英戦争の再開にまで導き、英国＝アイルランド条約とロイド・ジョージ自由党内閣を潰す

ことを意図していたのである。(C, p.186)

北アイルランドのIRAは当然のことながらカトリック住民を保護するために、出動して戦った。南26州ではIRAは分裂していたが、北6州ではプロテスタント過激派との戦いにおいて、まだ統一が保たれていた。それでコリンズは英軍から「自由軍」に支給された武器・弾薬などを密かに北アイルランドのIRAに回したと言われている。(E, p.87, H, p.350)

2月下旬にシン・フェイン党の臨時大会が開かれた。コリンズはIRAの公然とした分裂を避けたかったので、デ・ヴァレラと総選挙の3ヵ月の延期などの協定をむすんだ。デ・ヴァレラの目的は、条約の可否を問う(敗北が明らかな)総選挙をさけることにあった。(B, p.374)だが、3月、デ・ヴァレラはシン・フェイン党を去り、新党「共和国同盟」を設立し、内戦も辞さないという演説をした。(H, p.319)IRAは完全に分裂した。

3月26日の反条約派のIRAによる禁止されていた軍大会の強行開催は、その分裂を確認するものにしかならなかった。それ以後反条約派のIRAはIrregulars(不正規軍)と呼ばれるようになった。彼らは臨時政府の打倒と英国との新たな戦いを始めると宣言した。(B, p.400)しかし、コリンズは昔の仲間である彼らと戦う気にはなれなかった。

8. 内戦の勃発とコリンズの暗殺死

4月14日、反条約派のIRAがダブリン市内のFour Courtsを占拠し、みずからの総司令部とした。それでも5月20日、デ・ヴァレラとコリンズは再び選挙協定をむすんだ。それは選挙の実施と相手側の面目を救うことを目的としていた。条約を選挙の論点としないことと、条約賛成、反対両派による統一候補の擁立と、選挙後の連立内閣の形成、を骨子としていた。(F, p.127)自由国にはすべての投票所を守るほどの軍隊もなかったし、Irregulars(不正規軍)が妨害行動にできれば、選挙の実施も覚束なかった。そうなれば条約違反ということで、条約そのものが破棄されてしまうかもしれないのだ。(B, p.395)

だが、そのような協定は条約に違反していたし、民意を問えないような選挙は民主主義に反する、と英植民地担当相のチャーチルは激怒して、撤兵や臨時政府への武器・弾薬の供給を中断した。(C, p.196)また、コリンズの作成し

た憲法は、デ・ヴァレラのかつての対案 Document No.2 に限りなく近いものだったので、英政府に修正されてしまった。⁽¹⁷⁾ それでデ・ヴァレラ＝コリンズ協定も御破算になった。

6月16日、投票日の朝にかろうじて憲法が発表された。投票の結果はデ・ヴァレラ派の完敗であった。78%が条約に賛成であった。(G, p.151) それでもなおデ・ヴァレラは連立内閣を形成できると思いこんでいたらしい。また、選挙結果を重んじるような人間でもなかった。IRA 両派の妥協がはかられたが、国防大臣をどちらが取るかで交渉は決裂した。6月28日、いよいよ反条約派の占拠する Four Courts への攻撃が始まった。内戦の勃発だった。占拠軍の中にいた前大統領のデ・ヴァレラは赤十字の救急車で逃亡し、前国防大臣のブルーアは最後まで戦って戦死した。(H, p.387) 7月コリンズは新設の総司令官になった。それは政治権力が一切ないポストだった。彼が権力を失ったのか否かは論者によって見解が割れているが、政治の実権が次の世代の Cosgrave にすでに移っていたことは確かであろう。

8月9日からコリンズは Irregulars から奪還したばかりのアイルランド南西部の視察の旅に出た。そして、グリフィスの死を知って、ダブリンに戻った。グリフィスはアイルランド共和国大統領という存在するのかもしれないのかよく分からない肩書で、過度のストレスのせいで死んだ。国葬の際にコリンズは総司令官の軍服を着て、先頭を歩いた。

8月20日、コリンズは再び南西部への視察の旅に出た。その夜コーク市で生まれ故郷の親戚などと会った。翌日の夕方5時頃、視察を終えコーク市に戻る途中で反条約派の IRA の待ち伏せ攻撃にあい、応戦中に右耳の後ろを撃たれてコリンズは殺された。なぜか同じ日デ・ヴァレラもコリンズらの近くにいた。(B, II, pp.423-438) わずかな相違だから英国が戦争の再開をしかけてくるはずがないと言って、対英条約の破棄を主張して対案 Document No.2 を提示し続け、ついに対英戦争よりもはるかに悪質で深刻な内戦を導いたデ・ヴァレラこそ、その後のアイルランドの停滞を招いた張本人であったように思えてならない。

〈参考文献〉

Michael Collins の生涯などは、主として下記の文献によった。

- (A) *Memorial of Arthur Griffith and Michael Collins* (Martin Lester, LTD., Dublin, 1923)
- (B) P.S. Beaslai, *Michael Collins and the Making of a New Ireland* (初版,

- Dublin, 1926) (Kraus Reprint, Millwood, New York, 1983) vol. I and II.
- (C) Frank O'Conner, *The Big Fellow* (初版, U.S.A. 1937) (poolbeg press, Dublin, 1979)
- (D) Margery Forester, *Michael Collins—The Lost Leader—* (Gill and Macmillan, 1976)
- (E) Calton Younger, *A State of Disunion* (Frederick Muller, LTD., G.B. 1972)
- (F) Leon O Broin, *Michael Collins* (Gill and Macmillan, 1980)
- (G) T. Lyle Dwyer, *Michael Collins and The Treaty—His Differences with de Valera—* (The Mercier Press, Cork and Dublin, 1981)
- (H) Tim Pat Coogan, *Michael Collins—A biography—* (Arrow, 1991)
- (I) John M Feehan, *The Shooting of Michael Collins* (Royal Carberry Books, 1991)
- (J) Meda Ryan, *The Day Michael Collins was shot* (poolbeg, 1989)
- なお、本文中の()内の記号 A, B, Cなどは上記の文献に対応するものである。

《注》

- (1) Richard P. Davis, *Arthur Griffith and Non-Violent Sinn Fein* (Anvil Books Dublin, 1974) p.93.
- (2) Ibid., p.91.
- (3) Ibid., p.166 cf. 毛沢東『抗日遊撃戦争の戦略問題』と(H)序文 xii
- (4) Ibid., p.168.
- (5) 中野好夫『アラビアのロレンス』(岩波新書) pp.2-3.
- (6) 同書 p.103.
- (7) 同書 p.171.
- (8) 同書 p.179.
- (9) 同書 p.206.
- (10) ムーディ, マーチン編著(堀越智監訳)『アイルランドの風土と歴史』(論争社) p.311.
- (11) Robert Kee, *The Bold Fenian Men* (Quartet Books, 1976) p.5 脚注
- (12) *Arthur Griffith*, p.116.
- (13) Griffith and O'Grady, *Curious Journey—An Oral History of Ireland's Unfinished Revolution—* (Huthinson, 1982) p.102.
- (14) Ibid., pp.162-3.
- (15) 高田久寿『炎の美女革命家 モード・ゴン』(誠文堂新光社 p.212)
- (16) *Curious Journey* pp.162-3.
- (17) F.S.L. Lyons, *Ireland since the Famine* (Collins/Fontana, 1973) pp.451-2.
- (18) Ibid., p.459.

なお、参考文献(I)と(J)はコリンズ暗殺の犯人探しをしている本だが、見解は真向から対立している。例えば、証拠とされ国立博物館に飾られているコリンズの帽子を、(I)は贋物とし、(J)は本物とみなしているという具合に。両書に限らずコリンズの研究書には、政治的立場—自由国か共和国か—の違いが、事実の解釈を大幅に異ならせているように思える。